

Changes in maternal consciousness after childbirth and related paternal and family support

宮中, 文子

<https://doi.org/10.15017/458567>

出版情報 : 九州芸術工科大学, 2003, 博士 (芸術工学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

第1章 研究目的

第1節 研究目的

「母親への発達」を促す援助を考える上で、出産後の母親意識の変化とそれに影響する要因について、第Ⅱ部では、出産後10か月の母親意識に関連する要因を検討し、母親意識が高いことには、母親自身の非抑鬱が高いこと、自己価値観が高いこと、夫婦関係の親密度が高いこと、その夫の父親意識が高いことなどが母親意識の関連要因と考えた。第Ⅲ部では、出産後1か月、10か月および18か月の3期において、母親意識の肯定的な変化には、抑鬱傾向がないこと、自己価値観が高いこと、夫婦関係の親密度が高いこと、および父親の意識や支援行動など、父親の在り方が影響するものと考えられた。第Ⅳ部では、マタニティブルーは「母親への発達」の過程における心理的危機とみなしてもよいと考えられた。

第Ⅱ部から第Ⅳ部まででは母親意識に影響する要因のうち家族に関しては、特に父親の在り方について検討してきたが、本第Ⅴ部では子育てに関わる家族のうち、祖母に着目した。乳幼児期における子育ては、約7割が核家族世帯でなされている今日、子育ては基本的には母親と父親とが行う家族の主な機能と思われる。子どもが出生した夫婦は家族の子育て機能を形成していく過程にあるが、その家族に対しては公的な育児支援の他に、私的な子育て支援が必要である。出産後の乳児期早期においては、共働き夫婦での子育て支援の期待や住居環境や経済的な依存などから、祖父母との同居をする者も多く、同居はしないまでも祖父母が近隣に居住し、子育て支援をしている状況が多くみられる。我が国では里帰り分娩などによる実母や義母などの子育て支援が行われていることが多い状況である(宮中,1993)。こうした豊富な子育て経験を生かした祖母の孫への養育的関わりは、私的育児支援行動の1つとして重要と考えている(木村,1990;清水,1994;宮中ら,1995/1996;松岡ら,1996/1997)。これまでに祖母の心の健康には、孫と主体的に関わることが主観的幸福感にプラスに影響し、逆に育児支援のためやむを得ず関わることで抑鬱傾向に影響することを報告してきた(宮中ら,1995/1996)。ここでは、祖母の子育て参加が母親にいかなる影響を与えるかについて明らかにすることとした。